

医療維新

シリーズ 「医学部卒業後10-15年目の医師たち」～JCHO編～



研修医が個性を試せる“舞台”がある

「若い頃は試行錯誤を」、外交官を夢見た話も

オピニオン 2019年2月8日 (金)配信 独立行政法人 地域医療機能推進機構 (JCHO) 理事長 尾身茂



私自身が医師として少し変わった経歴を持つ（詳しくはJCHOホームページを参照）から、というだけでなく、若い人たちにはもっと試行錯誤してもらいたいと思っています。医学部を卒業して臨床研修中の医師も、臨床研修を終えて専門分野の研修に進む医師も、専門医を取って「さあ専門分野で存分に活躍するぞ」という医師であっても、まだまだ若い。経験や体験は相対的に少なく、視野は狭い状態と言えるでしょう。自身が経験・体験した範囲で、「好き」「面白い」「自分に向いている」と感じたことはあるでしょうが、「もっと好きになること」「もっと向いていること」があるかもしれないという意味です。

私自身は当初「医師になろう」とは全く考えていませんでした。高校生の時に1年間アメリカ留学した経験から、外交官や商社マン、新聞記者など、冒険の匂いがするような「楽しく世界を飛び回る」仕事がしたかった。「外交官は税金を使って世界旅行ができる」くらいにしか考えていませんでしたが、当時の私には大きな目標でした。

ところが留学から戻ったら、「楽しく世界を飛び回る」ために入学を希望していた大学の入試がなかった。学生運動の影響です。その結果、慶応義塾大学に入りましたが、将来への迷いのようなものが心に残った。「どうしようか」と悩む毎日でした。そうこうして3年生になった時、自治医科大学が創設され、第1期生を募集していると知りました。

ご存知の通り、へき地などの医師がいない、医師が少ない地域で一定期間勤務すれば学費は無料になり、返済不要の奨学金ももらえるという条件です。フィールドこそ国内限定ですが、私にとっては「楽しく世界を飛び回る」仕事で、「これは！」と思って文字通り飛びつき、幸運なことに入学できました。在学中は、医学、医療と直接関係のない本を乱読しました。

東京都の行政官との出会いで医療行政の道へ

卒後は東京都立墨東病院での研修医を経験しました。一人で離島やへき地へ行くことが見えているので、特に救急に関係する疾病や手技などをかなり勉強しました。「自分のせいでもなくなる人は出してはならない」の一点集中で、今振り返っても、がむしゃらでした。「がんに興味はないので、救急を教えてください」と言って叱られたこともありました（笑）。

研修後は東京都行政下にある伊豆諸島の医療機関などで勤務。その際に、東京都衛生局（当時）の方々と仕事をする機会に恵まれて、行政仕事の面白さを知ります。医師と対等に、腹を割って話をしてくれる担当官らの姿に興味を持ったのがきっかけですが、「あなたは、□□地域で○カ月勤務してください」なんていうことを言われたりもする。「患者を治す」という医師の大命題に加え「社会を治す」という視点を初めて学んだ瞬間でした。

その後、WHO（世界保健機関）で20年近く勤めた後、帰国し、大学の教授なども務めました。縁が縁を呼び、全国社会保険協会連合会、厚生年金事業振興団、船員保険会が運営していた医療機関などの再編・統合に携わり、地域医療機能推進機構（JCHO）を作って全国に57病院を持つグループのトップとなり、今に至ります（詳細は『[新独法JCHO、57病院率いて始動 - 尾身茂・JCHO理事長に聞く ◆Vol.1](#)』などを参照）。何が起こるか分かりません。

私が公衆衛生の世界に来たのは、「向いている」と思ったから。臨床では外科、小児科、産科で勤務し、特に外科では「面白いな」と思ったものの、手技が天才的に上手な同僚を横目に「これで一生、というのはどうも合わないな」とも感じた。「面白いな」「向いているな」というのは個性なので、若い人たちには、いろんな「面白いな」「向いているな」に出会ってほしい。そういう意味でも、医師として活躍する場を若いうちから固定してしまわない方が良い。iPS細胞を発見した山中伸弥先生も、整形外科医から世界の研究者になりましたよね。

JCHOは多様な個性を受け入れる

私たちJCHOは、地域医療、地域包括ケアの要として地域住民の多様なニーズに応え、地域住民の生活を支えることが使命です。多様な病床数や診療科を持つJCHO病院は、それぞれが地域の医療に貢献しており、その第一線を守る熱意のある指導医・上級医の下、研修を受けることができます。

医師臨床研修で言えば、基幹病院指定を受けているJCHOの24病院中、マッチング率100%のフルマッチは14病院（58%）で過半数を超え、一般的には敬遠されそうな都市部ではない人吉医療センター（熊本）、可児とうのう病院（岐阜）、徳山中央病院（山口）、星ヶ丘医療センター（大阪）などもフルマッチ。毎年人気も高く、われわれの自信になっています。それぞれの病院が、特性に応じて独自に症例検討会や救急研修、指導医の体制強化などに取り組み、教育体制の充実を図っています。



また、グループとしては他の団体に先駆け、専門研修修了後の医師を対象に「JCHO版総合内科医（Hospitalist）育成プログラム」も実施しています（『JCHOが育成する“病院総合医”』を参照）。全国の57病院をフィールドに、それぞれの医師のニーズに応じた修練を積める環境を用意しています。

今後も、多様な個性が活躍できる環境の醸成に力を注ぎます。どうぞ、思い切ってJCHOグループに飛び込んでください。

シリーズ [「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～](#) »